

〈東北・新潟の活性化応援プログラム〉 2017年助成団体活動成果レポート

助成団体

がっこう 網地島ふるさと楽好

宮城県石巻市

プロジェクト名

網地島ふるさと楽好

■地域の紹介

網地島は牡鹿半島の最西端、かつて世界有数の捕鯨基地であった鮎川港から海上約4キロメートルに位置しています。日露史上初の交易地としても知られ、網地白浜海水浴場など風光明媚な自然を満喫できる温暖な島です。

■地域の課題

網地島は遠洋漁業や捕鯨の衰退により人口が減少し、高齢化も進んでいます。特に網地浜地区は、子どもが1人もおらず、高齢者が多く住む限界集落です。そのため、子どもの大切さや愛おしさを身にしみている地域でもあります。島内の高齢者と島外の子どもの交流を図り、地域の活性化に取り組むことを課題としています。

■当団体の紹介

仙台市内の児童養護施設の子どもたちを2泊3日で島に無料で招待し、島の高齢者との交流を通じて本当の家族のように過ごします。双方の生きがい創出と地域コミュニティの活性化を図っています。



■背景・目的は？

- 虐待等に苦しんできた子どもたちや東日本大震災で親を亡くした子どもたちのために、島の高齢者との交流を通じ、心の傷を癒してもらうとともに、子どもの時期に楽しい思い出をたくさん作ってもらうこと
- 大切にされ、愛される記憶を持つことで、子どもたちが、自分を大切に思い、思いやりの心を育むことで、未来の希望を持てるようにしていくこと
- 温かな心の交流により、網地島の活性化を図っていくこと

■具体的な活動は？

活動を実施した日：平成30年8月3日(金)～8月5日(日)

場所：網地島（宮城県石巻市）

人数：34名（うち子ども27名）

▼活動内容

- 島の高齢者が先生となって、子どもたちに、島の昔の遊びや食事づくりを教えています。ふだんは、接することのない高齢者が先生なので、子どもたちは、初めは戸惑います。家庭のない子どもたちのために、濃密に接する機会を設けて、家庭を持った時に戸惑わないように信頼関係を築く練習をさせてあげたいと考えています。
- 家族的な雰囲気の中で、食事づくりを中心に体験してもらっています。島にはお店がないので、島のおじいさんたちが、海からとって来たうに、あわび、ひらめ、貝、海藻を子どもたちと楽しく会話しながら、料理します。つぶ貝は、島のおばあちゃんと額をくっつけるようにしながら、一つ一つむいていきます。本当の家族ではないけれど、島では、本当の家族のように過ごします。
- 子どもたちとボランティアとのドッジボール対戦も行います。弱い立場と思っていた子どもたちのしたたかさや強さに気付かされ、大人もびっくりです。

▼参加者の声等（子どもたちの声）

- 海の中で、大きなヒラメを踏んでびっくりした。ヒラメもびっくりして、逃げて行った。
- 大きな船が来ると、大きな波が来て、シーカヤックが転覆しそうになった。
- 網地島の海は、3m以上深さがあっても、底が見えた。
- 突堤のコンクリートのすき間にいたカニをたくさん捕まえた。
- 霧が出て、周りが見えなくなった。ドキドキワクワクする。
- 杉の葉っぱや松ぼっくりは、よく燃える。楽しい。
- おかずのうにが、動いているので、びっくりした。
- オニヤンマがたくさん飛んで来た。にらめっこをした。びっくりした。
- 島の夜は、何の音もしない。不思議だな。
- 網地島のネコはかわいい。
- 島のばあちゃんの料理は、とてもおいしい。
- メカブをご飯に乗っけて食べた。おいしすぎて、おかわりした。
- 火おこしは楽しいけど、煙が目にしみる。



▼島のおじいちゃんやおばあちゃんの声

- 膝が痛い、腰が痛い。でも、子どもたちの明るい笑顔を見ると、頑張れる。
- 子ども笑顔はいい。こっちまで楽しくなる。
- 今度会うときに、どのくらい背が伸びているか、楽しみだ。
- 大人になったら、自分の子どもを連れて、島に遊びに来てほしい。
- 子どもたちが書いた文集が楽しみだ。
- 来年まで、また島がさびしくなる。

▼実施にあたって工夫した点

- 島のスタッフが高齢になり、身体を動かせる人が少なくなってきました。首都圏等の大学生ボランティア等の絆を大切にしながら、その協力を得て、活動を行いました。



全国からボランティアがお手伝い



うにやあわびをふんだんに使った島の自慢料理



うにのからむき



島のカレーライス貝やイカがいっぱい



シーカヤックで出発だ



海には不思議なものがいっぱい



真っ白い砂浜と透明な海が自慢



涙が子どもたちの心を育む

■活動の成果は？

島では見ることがない子どもたちの明るい笑顔や素直な涙が、島の将来を悲観し、「仕方がない」と諦めていた島の高齢者を励まし、新たな意欲を生み出して行きました。

小学校の低学年から参加し、4回参加した子どももいます。単発のイベントではなく、長い時間をかけた交流です。何回も参加することで、お互いに思いやりやいたわりの気持ちを持つことができます。また、夏の野菜のようにニョキニョキ育つ子どもたちの姿をみるのが、とても楽しみです。さらに、小学生だった子が、周りに気遣いのできる頼もしい高校生になり、大人びた会話をするのが不思議でもあり、大きな喜びにもなっています。

温かな心の交流を大切に、関わってくださった全ての方々が幸せを感じられるように活動を続けてきました。島の高齢者の真心に触れて、いたわりの気持ちを持った、素直で優しい子どもたちが育ちました。

これまで多くの悲しい思いをした子どもも、楽しい夏の思い出をたくさん作って、笑顔で帰ってきます。

網地島ふるさと楽好で、島の高齢者たちの真心に触れ、子どもたちは、素直な気持ちになってくれます。周りの人に対する感謝の気持ちを持つとともに、優しい気持ちを持てるようになることが、子どもたちにとって、とてもよいことであると考えています。別れの時は、大人も子どもも素直な涙になります。

子どもたちには、網地島ふるさと楽好の思い出を絵と文章で表わしてもらい、文集にして、島のお年寄りにプレゼントします。文集に描かれる人はみんな笑顔になっています。子どもたちの優しい気持ちが伝わって来ます。これを楽しみにしている島のお年寄りもたくさんいます。これが、島のお年寄りを奮い立たせ、活動の意欲を生み出しています。

今年度から首都圏等の大学生ボランティアを多く集めて(25名)、子どもの相手だけではなく、食事の準備等を手伝ってもらうことにした結果、運営・スケジュールをうまく回すことができ、各ボランティアの負担も均一になったことから、満足度もあげることができました。来年度以降も、同様の手法を取っていきたいと考えています。

団体からのコメント

島のお年寄りの温かな愛に優しく包まれることで、虐待等で苦しんできた子どもたちの自己肯定感が高まり、思いやりの心が育まれてきます。そして、周りとの信頼関係を築き、自分の家族を持って、幸せになってほしいと考えています。

網地島は、高齢化率8割で、ほとんどが年金と漁業で細々と暮らしている高齢者ばかりです。このままでは、十数年後には、ほとんどの住民がいなくなってしまう。網地島ふるさと楽好を続けることで、これに関わる高齢者や「IJUターン」者を増やし、交流人口を増やして、コミュニティと航路と民間病院（網小医院）を維持し、島民の生活を守っていきたいと考えています。

首都圏や関西からの大学生ボランティアは、20名以上参加してくれるようになりました。網地島ふるさと楽好は、大学生にとっても、貴重な学びの場になっています。また、社会人になっても、手伝いに来てくれる方がおり、自分の結婚式に島の高齢者を招待してくれる方もおります。その他にも、子どもを連れて、島の高齢者のところに、泊りがけで遊びに来てくれる方もおります。こういった関係が生まれるのが、網地島ふるさと楽好のよいところ。小さな楽好ですが、多くの人を結ぶことで、みんなが幸せになることを願っています。

